

船具 にくさび万、にかくるもの也、

〔藻鹽草十七〕人事雜物并調度船

にくさび海舟にす

〔倭訓栞中編十八〕にくさび 八雲御抄に、舟荷にかくる物なりと見ゆ、荷檣の義にや、荷を積時に、

苦筵などにて竹をふちとして、葍とするなり、小舟の波よけ也といへり、

〔住吉物語〕住吉には略〇中 おきよりこぎくる舟には、あやしき聲にて、にくさびかけるなど、うたふ

も、さすがにおかしかりけり、

〔夫木和歌集二十五〕家集

にくさびぞかくべかりけるなにはがたふねうつなみのいこそねられね

能因法師

牽絃

〔倭名類聚抄舟具十一〕牽絃 唐韻云、牽絃音支、挽船繩也、

〔箋注倭名類聚抄舟具三〕所引文、廣韻絃字注同、牽作絳、按是連下絃字、從糸、與絳、纏字混、此作牽爲正、

又按古謂之筴、釋名、引舟者曰筴、筴、作也、作、起也、起舟使動行也、

〔運步色葉集津〕綱手

〔和漢船用具十一〕牽絃 本邦加賀芋綱を用、又竹繩は、もやひ綱とはすれども、引綱とすることな

し、なひ竹と云て、小竹をひしぎて是を作る、大竹は用ることなし、其製和漢違ひあり、万葉に綱手

とも引綱ともよめり、海上にては、大船より小舟へ綱を取て引、是を引船、漕船と云、川舟には、引柱

を立、是に付て陸へとり引綱也、

〔萬葉集十〕秋雜歌〔七夕〕

牽牛之、孀喚舟之、引綱乃、將絕跡、君乎、吾念勿國、
〔萬葉集十八〕奈都乃、欲波美、知多豆多都之、布禰爾能里、可波乃、瀨其等爾、佐乎、佐指能保禮、